ブィリーナにおけるモチーフの役割と意味
－「鳥を射る」を中心に－

水上　則子

ブィリーナの筋を構成するモチーフには、さまざまな種類があるが、その中には、特定の筋のブィリーナに集中して現れるものと、いろいろなブィリーナに見られるものとがある。ここでは、「鳥を狩る・射る」というモチーフを取り上げ、各ブィリーナにおける筋との関係を考えてみたい。

分析の対象としたのは、ルィブニコフの「歌謡集」(Песни, собранные П. Н. Рыбниковым. изд.2-ое, М.,1910)で、必要に応じて、ギリフェルジングの「オネガ地方のブィリーナ」(Онежские былины. изд.4-ое.М.-Л.,1949-1951)中のバリアントも参照した。以下、ブィリーナのタイトルに付した数字は、特に記さない限りはルィブニコフ集（第２版）における番号を表し、区別する必要がある場合にはP.をつける。ギリフェルジング集の中のブィリーナは、番号にГ.をつけて表す。タイトルの後の斜体の数字は、行数を示している。また、引用したモチーフに[]を付けて添えた数字は、作品番号に基づいたモチーフ番号である。

Ｉ：個々のブィリーナにおける筋とモチーフの関係

Молодец и худая жена(76)は、無名の主人公が結婚生活に失望して異国へ行き、数年暮らして戻ってきて、子供が生まれていたのを知り、喜ぶ、という筋で、むしろバラードと呼ぶべきものかとも思われる[1]が、「鳥狩り」は次のような形で、出だしに近いところに置かれている。

Стрелял он гусей, лебедей,
Стрелял он сероплавныих утушек.　[76]
彼は雁を、白鳥を射た、
泳ぐ灰色鴨を射た。　(7-8)

この狩りは、この後の筋の展開とはまったく無関係であり、孤立したモチーフである。ルィブニコフには、このタイトルの作品が４編あるが、このモチーフを持つのは上にあげた１編だけであることから見ても、語り手の混乱によって紛れ込んだものである可能性が大きい。

Илья Муромец и Идолище(62)は、タイトルが示すごとく、イリヤ・ムーロメツがイードリシチェを懲らしめる話である。このブィリーナでも、「鳥狩り」は冒頭に置かれている。

Стрелял Илья гусей, лебедей,
Стрелял малыих перелетных серых утушек,　[62-1]
И не мог убить ни гуся, ни лебедя

И не малые перелетные серые утицы; [62-2]

イリヤは雁を、白鳥を射た、

小さな渡りの灰色鴨を射た、

しかし、雁も、白鳥も、

小さな渡りの灰色鴨も殺せなかった。(3-6)

このあとイリヤは巡礼に出会い、イードリシチェの所行を聞いてキエフに向かう、という展開になっているが、ここでも、「狩り」と、その後の筋とのつながりは希薄であり、また、「若者と悪妻」と同じように、ルィブニコフ中の同タイトルの作品6編の中で、「鳥狩り」のあるのはこれだけであることから、紛れ込んだモチーフである可能性がある。しかし、イリヤが野に出ていたことが、しばしば敵の来襲のきっかけとなる「勇士の不在」という状況を作り出していること、また「巡礼との出会い」をもたらしていることが、筋につながる点である。

Илья и Сокольник(199)においては、イリヤをはじめとする勇士たちがキエフ近くに関所を設けたのに、それを通り抜けて鳥狩りをする人物ソコリニクが登場する。

Стреляет гусей, лебедей, пернасту утушку. [199]

(пернастых утушек)

雁、白鳥、羽毛の生えた鴨を射る。 (46,97)

ドブルィニャとイリヤがこれを見とがめ、彼と戦い、イリヤが彼を打ち負かす。

このモチーフは、ブィリーナの主題となる「戦い」のきっかけを作る、という点で、筋と結びついている。しかし、ルィブニコフ中にはこのタイトルのブィリーナが3編ある中で、「狩り」が出てくるのはこれだけであり、あとの2編では、ソコリニクが関所を通り抜けること自体が戦いの原因となっている[2]。従って、「狩り」とこの筋との結びつきは、やはり必然的なものではないと考えられる。しかし、この人物の「鷹匠」という名ど、「狩り」とはきわめて自然に結びつくとも考えられ、紛れ込んだものだとは言い切れない。

Молодость Чурилы(179)においては、「川で魚をとる」「入り江で鳥を射る」「森で獣を狩る」という3種がセットになっている。このうちの鳥に関する部分だけを挙げると、次のとおりである。

Гуся да лебедя повыстрелили,

Серую пернату малу утицу: [179]

雁も、白鳥も、

羽毛の生えた灰色鴨も射尽くしてしまった。(39-40)

ここでは、狩猟を行っているのはチュリーラの従士たちで、彼らが獲物を取ってしまうので困る、という苦情がヴラジーミル公のもとに寄せられ、公

はチュリーラという人物を知る、という展開になっている。この筋のブィリーナは、ルィブニコフに２編、ギリフェルジングに３編（うち１編はルィブニコフ№179の語り手と同人）あるが、そのすべてに、何らかの「狩猟」が登場しているので、この筋には不可欠なモチーフであると思われる。

Вольгаにおいては、「主人公の力を恐れて、鳥や魚や獣が逃げ去ってしまう」というモチーフがあって、それに対応する形で狩りが行われることが多い。38においては、ヴォリガが地上を歩くと、「獣は森へ散り、鳥は空へ散り、魚は青い海へ散る」。やがて従士を集めたヴォリガは、森（の地面の上）・森（の高いところ）・海の３カ所で、獣・鳥・魚を狩るように従士たちに命ずるが、獲物がなく、ヴォリガが狼や怪鳥やカマスに変身して狩り出す、ということになっている。鳥に関する部分のみ挙げると次のとおりである。

Ловите гусей, лебедей, ясных соколей,
И малую птицу пташицу, [38-1]
（従士への命令）雁、白鳥、輝くハヤブサを、
そして小さな小鳥を捕えよ、 *(51-52)*
Ловили по три дни и по три ночи,
Не могли добыть ни одной птички. [38-2]
（従士たちは）３日３晩にわたって捕えようとしたが、
一羽の鳥も得られなかった。 *(58-59)*
Заворачивал гусей, лебедей, ясных соколей,
И малую птицу пташицу. [38-3]
（怪鳥に化けたВольгаは）雁を、白鳥を、輝くハヤブサを、
そして小さな小鳥を狩り出した。*(62-63)*

この狩りの後、ヴォリガはトルコ王の動静を探るために、従士を派遣しようとするが、誰もふさわしい者はなく、ヴォリガ自身が赴いてトルコ王のルーシ遠征の企みを聞き、トルコ王をうち負かす。

ここでは、三界の生物の逃亡と狩りは、ヴォリガの超人的な力を示すモチーフとなっており、また、狩りにおける「従士の不成功－ヴォリガの成功」と、トルコへの敵情視察における「従士の不適－ヴォリガの成功」とが対置されているのではないかと思われる。この２つの点から、本質的なモチーフと言えよう。

Вольга(146)においても同様の構図が展開される。ただし、ここでは、逃亡し、そして狩られる生き物が、獣と魚のみで、鳥の狩りは行われない。そのかわりに、同じような表現が、敵王に対して使われている。

От моей от славы богатырския
Куницы и лисицы ушли в темны леса,
Рыба ушла во сине море,
Во сине море, в глубоки станы;

私の勇士としての名声に
貂や狐は暗い森へ逃げ去り、
魚は青い海へと、
青い海の、深い淵へと逃げ去った　　(22-25)
От моей от славы богатырския
Уехал царь Салтан Бекетович
Со своей царицей с Давыдьевной
Во славну Золоту орду.
私の勇士としての名声に
サルタン・ベケトヴィチ帝は逃げ去った、
帝妃ダヴィヂエヴナと共に、
栄えある金の汗国へと。　　(69-72)

これは、鳥を入れるのを忘れた例、ともとれるし、敵対者の王を鳥に擬して「狩って」いる、とも考えられる[3]。

Вольга и Микула(115)にも、「主人公の力を恐れて逃げた鳥・獣・魚を狩る」というモチーフが見られる。ここでは狩りをする人物の名が「ミクーラ」となってしまっているが、これはルイブニコフ中に注記されているように、語り手の単純な誤りである。ここでの狩りは、38よりも記述が簡潔であり、従士も登場しない。

Тут-то Микулушка Селянинович
Поладил петелки шелковые:
Этую птичку повыловил.
そしてミクーラ・セリャニノヴィチは
絹の編目を作り
この鳥を捕えた　　(13-15)

この後は このタイトルの他のブィリーナと同じ展開となる。主人公は野へ行き、不思議な農夫と出会う（通常はこの農夫の名がミクーラ）。主人公と農夫は同行することになるが、農夫の馬が速くて追いつけない。主人公は農夫に馬を譲ってほしいと持ちかけて一笑に付される。このように、狩りはその後の筋とは無関係である。

ヴォリガという人物が登場するブィリーナには、"Вольга"というタイトルのものと、"Вольга и Микула"というタイトルのものとがあり、それぞれの中に登場するヴォリガが同じ人物かどうかは疑問視されているが、起源の問題を別にして、残されている作品の中の人物像を見る限りでは、この２つのブィリーナは、かなり厳密に区別して歌われていたように思われる。前者は超人的な公ヴォリガの狩りと遠征を、後者は超人的な農夫ミクーラが武人ヴォリガよりどれほど優れているかを語ることを主眼としている。そして、ルイブニコフとギリフェルジングを合わせると、Вольгаは４編、Вольга и Микула

は１０編収録されているが[4]、ミクーラが登場するブィリーナで、「狩り」のモチーフを持っているのは、このP.115の語り手のものだけである。また、この語り手には、上述のようにヴォリガとミクーラを逆にしたり、ギリフェルジング中のバージョンでは、ヴォリガとミクーラが共同で狩りをしているとするなど、混乱と思われる点が目立つ。従って、これは語り手の誤りによって紛れ込んだものと考えてよいだろう。

Михайло Потыкは、しばしば入り組んだたくさんのモチーフを持つ長いブィリーナである。ルィブニコフ中には８編（11,12,28,28bis,113,166,196,218. このうち11と12は同人で、11は断片だが、12とは異なるところが多い。28と28bisも同人、この２つはほとんど同じ）収録されているが、そのうちの３編に、「鳥を狩る／射る」というモチーフが見られる。

Стрелял-то он гусей, лебедей,
Стрелял малых перелетных утушек. [11-1]
彼は雁を、白鳥を射た、
小さな渡りの鴨を射た。 (11 *9-10*)
Хотит подстрелить белую лебедушку. [11-2]
彼は白鳥を射ようとした。 (11 *19*)
Можете ли злучить эту лебедку на синем море,
Чтоб не ранену лебедку, не кровавлену? [12-1]
青い海辺の白鳥を捕えることができるか、
白鳥に傷をつけずに、血を流さずに？ (12 *19-20*)
Хотит подстрелить эту белую лебедушку. [12-2]
この白鳥を射ようとした。 (12 *33*)
Он стал гулять по заводям,
Стрелять гусей и лебедей, [113-1]
Увидел он белую лебедушку,
Натягивал свой тугой лук. [113-2]
彼は入り江を歩き回り、
雁や白鳥を射はじめた、
彼は白い白鳥を見て、
強弓を引き絞った (113 *85-88*)

このうち、12では、射ようとした白鳥が娘に変身し、113では、「自分は白鳥ではなく娘である」と言う。ミハイロは彼女と結婚し、「片方が先に死んだら、残された方も一緒に墓に入る」という誓いをたてる。やがてマリヤが死に、ミハイロは約束通り墓に入り、死体に集まってきた蛇の力を借りてマリヤを生き返らせる。その後、マリヤに求婚者が現れ、彼女を連れ去る。ミハイロは取り戻そうとあとを追うが、マリヤは奸計を用いてミハイロを殺そうとし、最後はミハイロに殺される。

「白鳥が娘に変身し、結婚する」というモチーフは、８編のうち３編にしかないので、一見本質的なものではないかのように思われる。しかし、上にあげた８編のうち、28と28bisと218では、マリヤの名が、彼女が他国の王などの求婚者と共に去る場面までまったく出てこない点が不自然であり、彼女との出会いと求婚の場面が脱落していると考えられる。したがって、この３編を除外して考えると、５編のうちの３編に存在する、ということになり、重要なモチーフと見なすことにも無理はない。

さらに、このヒロインの名には、一貫してЛебедь Белаяという形容語(?)が付けられている。ミハイロ・ポティクにおいては、ほとんどすべてのバージョンに共通して見られる、核となるモチーフは、「死者と共に墓に入る」と、「死んだ妻を生き返らせる」である[5]が、このブィリーナには、このほか、マリヤがミハイロを石に変え、旅の巡礼がそれを「肩ごしに投げて」人間に戻す、など、超自然的・魔術的なモチーフが多い。このことと、ヒロインの「白鳥のマリヤ」という名が、彼女は本当は人間ではない、従って不思議な力を持っている、というイメージを与えていることとは、密接に結びついているといえる。したがって、「白鳥が娘になる」は、このブィリーナの深層において重要な役割を果たしているモチーフだと結論してよいであろう。

「射ようとした鳥がものを言う」というモチーフは、Королевичи из Крякова(21)にも見られる。ここではものを言うのはカラスである。このブィリーナも「狩り」から始まっている。

Охвочь-то был стрелять гусей, лебедей,
Малыих перелетныих серыих утушек. [21-1]
雁を、白鳥を、
小さな渡りの灰色鴨を射る狩りだった。 (6-7)
Не наехал ни гуся, ни лебедя,
Ни малаго перелетнаго утеныша. [21-2]
しかし、雁にも、白鳥にも、
小さな渡りの鴨にも出会わなかった。 (11-12)

王子はカラスを見て、射ようとする。

--Я подстрелю эту птицу черна ворона,
--Расточу его я кровь-то по сыру дубу,
--Тушицу его спущу я на сыру землю,
--Перьицо распущу я по чисту полю,
--По славному раздольицу широкому.-- [21-3]
「この黒いカラスを射よう、
その血を湿れるカシワの木に流そう、
そのむくろを湿れる大地に落とそう、
その羽根を清い野原に散らそう、

栄えある広い野原に。」　　(74-78)

カラスは、「老僧を殺せば救いはなく、カラスを射ても益はない」ということわざがあるではないか、自分を射たりせず、キエフのヴラジーミル公のもとへ行って、敵と闘え、と言う。王子はその言葉に従い、来襲者と出会って彼と闘うが、相手が生き別れになった自分の兄弟だと知り、母の元へ連れ帰る。

この題名のブィリーナは、ルィブニコフ中には1編しかないが、ギリフェルジングには6編収録されていて、この7編のすべてに、「射ようとしたカラスに『射るな』と言われる」というモチーフがある。主人公が、カラスの「野へ行け／タタールと戦え」という言葉に従うことが、このブィリーナの主題である、「兄弟との再会」につながるので、このカラスとの出会いは筋にとって不可欠のモチーフである。

これに先行する「雁・白鳥・鴨の狩り」は、ギリフェルジング中では、6編のうちの4編（Г.87,136,147,302.うちГ.87はルィブニコフ集21番の語り手と同人）に含まれている。上の例のように、狩りに出かけたが獲物がなかった王子が、腹いせにカラスに矢を向けるという流れは自然であり、不可欠とは言えないまでも、意味のあるモチーフではないかと思われる[6]。

カラスに向かって「射るぞ」と脅す、というモチーフは、Наезд Литовцев にも見られる。その筋は、二人のリトアニアの王子がモスクワ又はルーシを攻め、公の妹と甥をさらい、町々を略奪するが、公ロマーン・ドミートリエヴィチが二人を打ち負かす、というものである。戦いの前に、公は従士たちに「木の上でカラスが鳴いたらそれを合図に攻め込め」と言いおいて、自分は狼その他の生き物に変身して、王子たちの馬や武器を使えなくし、それからカラスに変身して木の上で鳴く。そのカラスに向かって、王子たちは次のように言う。

Застрелим ти, черна ворона,
И спустим твою тушу на сыру землю,
И распустим твое перье по чисту полю,
И прольем твою кровь по сыру дубу,
Предадим ти смерти скорыя.　　[135]

おまえを射よう、黒い烏よ、
そしておまえのむくろを湿れる大地に落とそう、
おまえの羽根を清い野原にまき散らそう、
おまえの血を湿れる柏の木に流そう、
おまえにすみやかな死を与えよう。

(135 *277-281. 289-293*もほぼ同じ)

Застрелим ти, чернаго ворона,
Кровь твою прольем по сыру дубу,

Перье твое распустим по чисту полю. [152]
おまえを射よう、黒い鳥よ、
おまえの血を湿れる柏の木に流そう、
おまえの羽根を清い野原にまき散らそう。 (152 *205-207,215-217*)
И стрелим тебя, черна ворона,
Упалаго и усталаго,
Мы прольем кровь по сыру дубу
И распустим перье по чисту полю. [164]
おまえを射よう、黒い鳥よ、
落ちた鳥、疲れた鳥よ、
おまえの血を湿れる柏の木に流そう、
おまえの羽根を清い野原にまき散らそう。
(164 *178-181.168-170*もこれに近い)

カラスの姿をした公は、この脅しをまったく顧みずに合図を続け、従士たちは王子たちに襲いかかる。王子たちは敗北し、報いを受ける。

この筋のブィリーナにおいて特徴的なモチーフは、「公が変身して武器を使えなくする」と、「カラスの声を合図に攻撃する」である。どちらも、ルィブニコフ中の5編のすべてに含まれている。前者は、ВолхあるいはВольгаの名で知られているブィリーナのモチーフに酷似していて、一方が他方からそっくり借用したとしか考えられないほどであるが、後者は、このブィリーナに独自のモチーフと言えるかも知れない。そして、ここでは、カラスを脅すというモチーフは、この「合図」のモチーフの一部であると考えられる。

Дюк (Степанович)は、ルィブニコフ中には14編(16,29,63,88,106,130,131,144,172,181,184,197,202,216.このうち130は断片で、131は同人が同じ作品を最後まで歌ったもの)収録されていて、その中には、「鳥を狩る/射る」というモチーフを持つものがいくつか見られる。29,63,181には、雁・白鳥などの狩りが見られる。

Он ходил-гулял по тихиим по заводям,
Стрелял серыих гусей и стрелял лебедей: [29]
彼は静かな入り江を歩き回り、
灰色雁と白鳥を射た (29 *5-6*)
И стрелял гуся и лебедя
И пернастых серыих утушек. [63]
雁を、白鳥を
羽毛の生えた渡りの灰色鴨を射た (63 *26-27*)
На гуся ехать Дюк, на лебедя,
На серу пернату малу утицу. [181-1]
Не наехал Дюк ни на гуся, ни на лебедя,

И не серой пернатой малой утицы, [181-2]

デュークは雁を、白鳥を、

羽毛の生えた小さな灰色鴨を追った

デュークは雁にも、白鳥にも、

羽毛の生えた小さな灰色鴨にも出会わなかった (181 *7-8*)

106にも「狩り」が見られるが、射るものはやや異なっている。

Ездит Дюк за охотою,

За куницами, за лисицами,

За серыми пермястыми за утками.

デュークは狩りに赴く、

貂や狐や羽毛の生えた灰色鴨を狩りに (*11-13*)

130,131でも彼は矢を射ているが、何を射ているのかは語られていない。

「デューク」のブィリーナの中心をなす筋は、「富裕な公子デュークがキエフへ出かけ、その富でヴラジーミル公の側近（しばしば前述のチュリーラが登場する）やキエフの住人を圧倒する」というものがほとんどで、デュークの富を描くために、デュークの馬や武具の豪華さ、デュークがキエフで語る自国の建物や道路や衣装や食べ物の様子（キエフの事物と比較して、どれほど優れているかを言う）、チュリーラとの衣装比べ、ヴラジーミル公が命じてデュークの財産を書き出させるが紙がどれだけあっても足りない、といったモチーフが用いられている。

そして、その中の１つに、「高価な矢」のモチーフがある。これは、デュークの持っている、あるいは狩りに使った矢について、金が巻いてあるとか、宝石が付けてあるとか、特別なワシの高価な羽根が矢羽根としてつけてある、といったことを述べる、８～４０行に及ぶモチーフで、上述の１４編のうち、８編(29,63,106,130,131,181,184,202)にある。そして、「鳥狩り」のモチーフを持つ３編は、この「高価な矢」を持つ８編に含まれている。従って、「デューク」のブィリーナにおいては、「狩り」は、あくまでも「矢」のモチーフの一部として使われていると言うことができる[7]。

デュークのブィリーナには、このほかに、「カラスを射ようとする」というモチーフを持つものもある。

Спущу твою я тушу о сыру землю,

И распущу твое я перье по чисту полю,

И пролью твою кровь по сыру дубу,

Предам тебе я смерть да скорую: [131]

お前のむくろを湿れる大地に落とそう、

お前の羽根を清い野原にまき散らそう、

お前の血を湿れるカシワの木に流そう、

お前にすみやかな死を与えよう、(131 *104-107*)

こう言われたカラスは、主人公に「射るな」と言い、「野へ行けば一騎討ちの相手が見つかる」と教える。

しかし、これは、ルイブニコフ中の例は同じ語り手による２編だけ、ギリフェルジング中でも、１４編収録されているうちの１編にしか見られないモチーフであり、紛れ込んだものと考えるのが妥当であろう。

Иван Годиновичでは、キエフの勇士であるイワンの求婚とその失敗が語られる。イワンは他国の女性に求婚し、承諾を得るが、キエフへの帰途で別の求婚者（他国の王子、コシチェイなど）が現れ、彼女は変心する。二人はイワンを木に縛りつけるが、この求婚者は鳥を射ようとしてその矢が自分に当たり、死ぬ。

И пала прямо в темя Федору Ивановичу, [10]
そしてフョードル・イヴァノヴィチの頭に命中した (10 *84*)
Стрелил-то во черна ворона,
Стрелил, не попал в его,
・・・
Пала ему в буйну голову: [122]
黒い烏を射た、
射たが、烏には当たらず
自分の頭に当たった (122 *117-121*)
"Подай-ко ты мой лук, калену стрелу,
Застрелю я голубя с голубушкою,
Разорю любовь да голубиную."
・・・
--Ты не стреляй-ко голубя с голубушкою
И не разоряй любови голубиныя,
Стреляй-ко ты Иванушка Гудинова во белы груди.--
И не попал-то Кощей в Ивана во белы груди,
・・・
Становилася Кощею во белы груди: [145]
「（コシチェイ）弓を、鍛えた矢を渡してくれ、
あのつがいの鳩を射てやる、
鳩の愛を引き裂いてやる」
「（ナスターシヤ）鳩のつがいを射るのはおよしなさい、
鳩の愛を引き裂くのはおよしなさい、
イワーヌシカ・グヂノフの白い胸を射なさい」
コシチェイはイワンの白い胸に当たらず、
（矢は）コシチェイの白い胸に当たった。 (145 *148-160*)
"Застрелю я голубка со голубушкой."

・・・

И не попал-то Кощей ни в голубка, ни во голубушку,

А попал во свою белу грудь, [195]

「あのつがいの鳩を射てやる」

コシチェイはどちらの鳩にも当たらず、

自分の白い胸に当たった (195 *132-137*)

また、93は、主人公の名はヴァシーリー・ブスラーエフとなっているが、ルィブニコフ中で指摘されているように、これらと同じブィリーナである。ここにもこのモチーフが見られる。

И хочет стрелить в сизыих два голубя.

・・・

Как стрелил-то в два сизыих голубя,

・・・

Она пала на Кощуя сына Трипетовича, [93]

２羽の蒼い鳩を射ようとした

２羽の蒼い鳩を射ると

矢はコシチュイ・トリペトヴィチに当たった (*26-38*)

第２の求婚者を失ったナスターシヤ（又はマリヤ）は、イワンのもとへ戻り、自分を妻にするようにと言って彼をほどく。イワンは彼女を切り殺す。

「鳥を射ようとする」モチーフは、以上のように、筋の中で不可欠な要素となっており、ルィブニコフ中に収録されている５編のすべてに存在する。

「ハトを射ようとした矢がそれる」というモチーフは、Добрыня и Маринка というタイトルのブィリーナの中でも、重要な位置を占めている。

ドブルィニャが町を歩いていて、マリンカの家の近くを通り、窓辺に２羽のハトがいるのを見る。彼はこのハトを射るが、矢はそれて、窓の中に入り、マリンカの情人に当たる。このあとマリンカは彼に術をかけて、動物に変身させる。ドブルィニャは母の力で元に戻され、マリンカは殺されるか逆に変身させられて終わる。

ここでの「鳥の射撃」は次のようである。

И стрелил-то он голубя с голубушкою,

・・・

И убила у Маринки мила друга,

Поганаго Тугарина Змиевича. [143]

つがいの鳩を射た、

そしてマリンカの恋人の

汚らわしいトゥガーリン・ズミエヴィチを殺した (143 *29-37*)

И стреляет в голубя со голубушкой:

Не попал ни в голубя, ни в голубушку,

・・・

И убил у Маришки мила дружка,

Мила друшка Пугарина Гагаринова. [192]

つがいの鳩を射る、

どちらの鳩にも当たらず、

マリシュカの恋人の

プガーリン・ガガリノフに当たった。 (192 *28-33*)

このモチーフは、ルィブニコフ中に収録されている３編のうち、188には含まれていないが、188は短い、断片的なバージョンなので、あまり重視する必要はないと思われる。また、ギリフェルジングには、この筋を持つブィリーナは１０編(5,17,78,122,163,227,241,267,288,316)あるが、そのうちの７編(5,163,227,241,267,288,316)がこのモチーフを持っている。従って、これは、本質的なモチーフと考えてよいであろう。

スフマンチイ(148)においては、主人公は、酒宴で黙り込んでいることをヴラジーミル公にとがめられて、自分には何も誇るものがないと言い、白鳥を捕えて来ることを約束する。

Привезу тебе лебедь белую,

Белу лебедь живьем в руках,

Не ранену лебедку, не кровавлену. [148-1]

白鳥を持って参りましょう、

生きた白鳥を腕にかかえて、

傷を負っていない、血を流していない白鳥を。 (*35-37*)

主人公は海辺へ出かけ、３つの入り江を回るが、鳥はいない。

Не плавают ни гуси, ни лебеди,

Ни серые малые утеныши. [148-2]

雁も、白鳥も、

小さな灰色鴨も泳いでいない。 (*50-51,54-55,58-59*)

主人公はこの後、敵の軍勢と戦い、自身が傷を負うはめになって、ヴラジーミル公への約束を果たせない。戻ってきたスフマンチイに、ヴラジーミル公は尋ねる。

Привез ли ты мне лебедь белую,

Белу лебедь живьем в руках,

Не ранену лебедку, не кровавлену? [148-3]

白鳥を持って来たか、

生きた白鳥を腕にかかえて、

傷を負っていない、血を流していない白鳥を？ (*129-131*)

スフマンチイはいきさつを話すが、ヴラジーミル公は信じず、違約をとがめる。やがて主人公が嘘をついているという疑いは晴れるが、彼はヴラジー

ミル公の元へは戻ろうとせず、悲劇的な死を迎える。

このタイトルのブィリーナは、ルイブニコフにもギリフェルジングにも各1編しか収録されていない（Г.63,タイトルは「スフマン」）。ギリフェルジングの例も、ほぼ同様の筋であり、このモチーフを持っている。

Привезу ти лебедушку живьем в руки,
А на твои на пир княженецкии,
На твои на стол на дубовыи. [Г63-1]
生きた白鳥を持って参りましょう、
公の酒宴に、
公のカシワのテーブルに。 (27-29)
Не наехал ни на гуся, ни на лебедя,
Ни на сераго на малаго утеныша. [Г63-2]
雁にも、白鳥にも、
小さな灰色鴨にも出会わなかった。 (35-36)
Привез ты ко мне нынь лебедушку,
Обещался кою да живьем в руки,
А ни сераго ни малаго утеныша. [Г63-3]
おまえは私に白鳥を持ってくるはずだった、
手の中で生きているのをと約束した、
だが灰色鴨すら持っていない。 (73-75)

この２つの例を見る限りでは、「白鳥を捕えてくる」という約束のモチーフは、主人公が敵と出会うきっかけを作るだけでなく、公との不和の原因でもあり、さらには主人公の死の原因であるとも言え、この筋の中では最も重要な役割を果たしていると思われる。

II：狩られる鳥の種類による分析

これまでに見てきた「鳥を狩る・射る」というモチーフは、狩られる鳥の種類によって次のように分類できる。

[62-1],[76],[199],[11-1],[21-1],[63],[179],[181-1]：「雁・白鳥・鴨を射る・狩る」。[113-1],[29]のように、「雁・白鳥」を「射る・狩る」の場合もある。以上の１０のモチーフは、表現形式の間にも差異が少ない。

この２種または３種の鳥の狩りは、ブィリーナの導入部かそれに近いところにおかれることが多く、このうちДюкの３例（[29],[63],[181-1]）は、前述のように、いずれもより大きい「高価な矢のモチーフ」に属するものである。これ以外の例を見ると、[62-1](Илья и Идолище)では、イリヤと巡礼を、[199](Илья и Сокольник)ではイリヤとソコリニクを、[179](Молодость Чурилы)ではチュリーラとヴラジーミル公を、[11-1]･[113-1](Михайло Потык)ではミハイロとその未来の妻を、[21-1](Королевичи из Крякова)では王子と

予言するカラスを、それぞれ出会わせる役割を果たしている。

[76](Молодец и худая жена)のように、筋とまったく結び付いていない場合は稀であり、その点からもこのモチーフが混入であるという見方は裏付けられるであろう。

[38-1],[38-3]は、狩りの対象が「雁・白鳥・鷹・小鳥」である点が異なるが、形式上は上の例に近い。この2例を考える上では、このブィリーナと同じ筋を持つВолх Всеславьевич（キルシャ・ダニーロフ Древние российские стихотворения собранные Киршею Даниловым. М.,1977 所収）における、同じ場面の表現が興味深い。

Он обвернется ясным соколом,
Полетел он далече на сине море,
А бьет он гусей, белых лебедей,
А и серым малым уткам спуску нет.
彼(Волх)は鷹に姿を変える
遙かな青い海へ飛んで行き、
雁を、白鳥を殺す、
小さな灰色鴨も容赦しない　　(79-82)

タカが猛禽であり、通常は狩りをする側に属するものであることを考えると、この形式のほうがはるかに納得できる。タカはブィリーナにはしばしば登場する鳥で、ルィブニコフ中でも30編に見られるが、狩られるものになっているのはこのВольга(38)だけである。また、[38-1],[38-3]では、3種の鳥の狩りで「鴨」となっているところに、птица птащицаという語が入っているが、これは、「鴨」を意味するутицаと混同されて使われている可能性もある。従って、[38-1],[38-3]は、「雁・白鳥・鴨の狩り」の崩れた形なのではないかと思われる。

[21-2],[62-2],[181-2]：「雁・白鳥・鴨がいない」。前述の「3種の鳥の狩り」に対応し、「狩りに行った」が「獲物がない」、という筋を構成する。この3例のうち、「獲物がない」ことが筋に多少とも関係があるのは21のみで、62では全く無関係、181では、このあとに「矢を使い尽くした」というモチーフが続くところから矛盾さえしている。したがって、このモチーフは、いささか機械的に使われる傾向があるものと思われる。

スフマンチイ（スフマン）に含まれている[148-2]と[Г63-2]は、形式は上の例と同じだが、このブィリーナには、「3種の鳥の狩り」はない。主人公が捕えると公言したのは「白鳥」だけだったはずなのに、「獲物がいない」ことを表現するのに鳥の名を3種挙げており、矛盾している。この点については、また「白鳥」のところで考えたい。

[38-2]も、「狩りに行った」が「獲物がない」という筋の一部であるが、ここでは「狩りの失敗」は重要である。しかし、形式の上では、鳥の名があ

げられていないなど、上の５例とはかなり離れている。

[143],[192]：「ハトを射ようとした矢が魔女（？）の情人に当たる」。これは、前述のように、「ドブルィニャとマリンカ」というタイトルで知られるブィリーナにしばしば見られるモチーフである。ドブルィニャがなぜ「つがいの鳩」を射ようとするのかについては、ルィブニコフの２例では何も語られていない。プロップは、マリンカの館は一種の娼家であり、またこのハトはしばしば「くちばしで接吻している」と描かれているところから、「部屋の中で若者を待っているものをほのめかす、看板のごときもの」であって、それがドブルィニャの反感と嫌悪をそそったのだと考えている（"Русский героический эпос"1955. с.259）。しかし、特に口承叙情詩において、「ハト」がしばしば「恋人」のメタファーとして使われていることを考えると、この「つがいのハト」は、本来は、主人公の前にいる恋人たちのメタファーだったのではないかと思われる。それが、しだいに実体化され、恋人たちとは別の存在として語られるようになり、その結果として、「鳥を射ようとした矢がそれ、恋人の一方に当たる」というモチーフが生まれたのではないだろうか。

[93],[195]：「ハトを射ようとして自分に当たる」。「イワン・ゴヂノヴィチ」に現れるこのモチーフも、狙われるのが「ハト」、当たって死ぬのが「恋人の一方」という点が、上の例と共通している。[145]では、当初はハトを射ようとした略奪者コシチェイは、主人公の許婚者に「イワンを射なさい」と言われてそちらへ矢を向けるので、厳密にはハトを射ているとは言えないが、同じモチーフとして扱ってよいものと思われる。

同じ筋のブィリーナでも、10では狙われる鳥は白鳥、122ではカラスとなっており、本来はハト以外の鳥を射るモチーフだった可能性もある。しかし、ギリフェルジングを見ると、この筋の７編のブィリーナ[8]のうち、射られる鳥がハトでないのは、P.10と同人のΓ.83と、P.122と同人のΓ.51のみで、あとはハトである。従って、この筋のブィリーナでは、射られる鳥は「ハト」であると結論してよいであろう。そして、上の筋との類似を考えると、その起源はやはり「恋人」のメタファーにあると思われる。

ただし、ここでは、矢を射るのは当たって死ぬ恋人自身であり、自分で自分を狙って射ることはありえない。そこで、このモチーフは、上述の「メタファーの実体化」が起こった後に作られたものだという見方ができる。

[21-3],[135],[152],[164],[131]：「カラスを射る」。カラスに対して、「その血を木に流し、躯を地面に落し、羽根を野原にまき散らしてやる」などという威嚇の言葉を向けるモチーフ。この脅し文句は、「血・躯・羽根」の３つに言及しているか、「血・羽根」の２つかという違いはあるが、５例とも非常に似通っている。このうち、[21-3](Королевичи из Крякова)では、カラスは「人間の言葉で」主人公を説得して射るのをやめさせ、野へ行かせ

て一騎討ちの相手（実は兄弟）に出会わせる。[131]は、同様のモチーフが「デューク」に入っている例で、デュークはカラスの言葉に従って野へ行き、イリヤに出会う。しかしこれはすでに述べたように混入したモチーフである。[135],[152],[164](Наезд Литовцев)では、カラスの正体は公である。カラスになる前に、公はリトヴァの王子たちの弓矢を壊しており、彼らには射ることはできないので、公は脅しを無視して従士たちに合図を続ける。

この脅しの言葉は、カラス以外の鳥に向けられている例はない。また、この５例以外で、カラスを射るというモチーフは、ルィブニコフでは、前述の「イワン・ゴヂノヴィチ」（122)のみである。

このように、カラスにまつわるモチーフには、カラスへの嫌悪と尊重という相反する２つの要素が認められる。このことは、ルィブニコフ中の他の例を見ても確かめられる。ルィブニコフ中では、「カラスのように飛ぶ」といった直喩やパラレリズム、メタファーを除けば、上の例の６編のほか、５編のブィリーナにカラスが登場している。上で見た６編のうち、「イワン・ゴヂノヴィチ」(122)では、「射る」の前に、カラスが木の上から人間の言葉で「コシチェイにはマリヤを支配できまい、できるのはイワンだ」と言う場面がある。残りの５例は上述のとおり、公がカラスに変身し、木の上で合図をして、王子たちに脅されるというモチーフだが、「射られる」という場面がないためにここに含まれなかったНаезд Литовцевもある(45)。このほか、「野で死んだ勇士の死体を啄む」が３例、「イリヤの夢に現れて、敵の来襲を告げる」が１例となっている。このように、カラスは、「不吉なもの」であると同時に「知恵のある鳥」なのである。

[11-2],[113-2]：「白鳥を射る」。これはいずれも「ミハイロ・ポティク」のモチーフで、主人公が射ようとした白鳥は、娘に変身して彼と結婚する。この「白鳥」と、雁や鴨と一緒に狩られている白鳥とが、意味を異にしているのは明らかである。前者の白鳥は、「娘」「花嫁」のメタファーという、婚礼歌・叙情歌の伝統につながるものであり、後者の白鳥は、おそらく食卓にのせるために[9]狩られている鳥だからである。そして、ここでも、本来は「娘」のメタファーであった「白鳥」が、しだいに実体化された結果、「娘に求愛し、結婚した」というモチーフが、「白鳥を射ようとしたら娘に変わり、結婚した」というモチーフに変わったのではないか、と考えることができる。

「スフマン」においては、「白鳥」の形象はいささか奇妙である。ギリフェルジング中の例では、主人公は「公の食卓のために」白鳥を持参すると約束し（[Г63-1]）、手ぶらで戻った彼に対し、公が責める言葉は「鴨さえ持っていない」である（[Г63-3]）。しかし、ルィブニコフ中では、約束するのも、公が「持参したか」と尋ねるのも、「無傷の、血まみれでない白鳥」である（[148-1],[148-3]）。そして両方に共通しているのは、この約束が酒宴での

「自慢話」の代わりに行われていること、そして「生きた白鳥」と明言されていることである。

「白鳥を持参する」が、なぜ勇士の手柄となりうるのか。また、食卓に供するのに、なぜ「生きた白鳥」でなければならないのか。ここには、「花嫁」としての白鳥と、獲物としての白鳥の要素が混在している。「生きた、無傷の白鳥」を持参する、という約束は、「美しい、欠点のない花嫁を見つけてくる」というモチーフのメタファーであったと考えれば、それは宴席で自慢するに足るものとなろう。そして、「ミハイロ・ポティク」では、「白鳥＝花嫁」が主要な人物の一人であったから、暗喩の意味が変わっても、白鳥と花嫁への「解体」という形をとったが、「スフマン」では約束だけで、人物として登場しないために、暗喩が忘れられると「花嫁」も忘れられた、と考えられないだろうか。その上で、何のために白鳥を持ってくるのかを説明するために、「獲物としての白鳥」の要素が付け加えられた、とすれば、この矛盾したモチーフが理解できるように思われる。上述の、「白鳥を捕えるために」出かけたはずなのに、「雁も、白鳥も、鴨もいない」と述べられている矛盾も、ここに理由があると考えてよいのではないだろうか。

［結論］

「雁・白鳥・鴨」の３種の鳥の狩りは、「ヴォリガ」、「デューク」のように、筋に沿って分布している場合には、それぞれ独自の意味を持ち、それ以外の例のように、筋を問わずに用いられている場合は、「出会い」のきっかけとなるモチーフである。これ以外の鳥の狩りは、特定の筋と結びついているものがほとんどで、それぞれ筋の中で重要な役割を果たしている。それ以外の筋に入っている場合は、混入と見てよい。

「つがいの鳩」は、二人の恋人のメタファーであり、「つがいの鳩を射たら恋人の一方に当たった」というモチーフは、「恋人＝鳩を射て、一方を殺す」という、メタファーを含んだ表現が実体化して生まれたものである。
「白鳥を射ようとしたら娘に変わった」というモチーフも、「娘＝白鳥に求愛して、結婚した」という表現の中のメタファーが実体化したものと考えられる。メタファーが失われるときに、実体化という方向をとらず、一方の形象の消失が起こると、筋の中に矛盾が残る場合がある。

(1) 「ブィリーナ」と「バラード」、あるいは歴史歌謡との境界は必ずしも明確ではない。ここでは、この問題には立ち入らず、ルィブニコフ第1巻・第2巻と、ギリフェルジングの3巻に収められているものは「ブィリーナ」と呼んだ。

(2) Илья и Сокольник(80)では、ソコリニクが、「3種の鳥の狩り」と同じ形式だが、意味はまったく異なる次のような言葉を口にして、イリヤを侮辱する。

Не тебе бы ездить во чистом поли, на добром кони:

・・・

И пас бы гусей, лебедей и пернастых утушек!

お前など清い野原で良い馬に乗る柄ではない、

雁や白鳥や羽毛の生えた鴨の番でもしていろ！ *(109-111)*

(3) ヴォリガとその敵王との戦いは、しばしば2羽の鳥の戦いにたとえられる。例：Бьется сокол да с черным вороном,

Перебил сокол да черна ворона.

Ясный тот сокол--Вольга богатырь,

Чорный тот ворон--то сам Сантал.

鷹が黒い鳥と闘っている、

鷹が黒い鳥を打ち負かした。

この勇ましい鷹は勇士ヴォリガ、

この黒い鳥はサンタル王。 (Г.15 *42-45*)

(4) この2種のブィリーナは、主人公がヴォリガ一人である場合には、"Вольга"ないし"Волх"、ミクーラも登場するブィリーナには"Вольга и Микула"というタイトルをつけて区別しているが、Г.156のВольгаは、ミクーラも登場しているのにタイトルに反映されておらず、不適切であると言わなければならない。

(5) この2つのモチーフを持っていないのは、ルィブニコフ中では、11,28,28bis,218のみ。11は主人公が白鳥に出会うところで終わっている断片であり、28と28bisと218は、前述のように脱落のあるバージョンである。

(6) トロフィム・リャビーニンが語っているP.21とГ.87には、射ようとした白鳥が「自分たちは白鳥ではなくナスターシア・ミートリチエヴナ（の複数形）である」という場面があるが、これは他のバリアントにはなく、「ものを言うカラス」に影響された「紛れ込み」ではないかと思われる。

(7) 「高価な矢」のモチーフの中には、次のような「狩り」が入っていることもある。

Когда бил он из-под каменя спод яхонта самоцветнаго,

Убил три орла и три орловица;

Он не тых убил, которы летают на святой Руси,

А тых убил, которы летают по синим морям:
いつか彼はヤーホントの宝石の下から
３羽のワシと雌ワシを殺した、
彼は聖なるルーシを飛んでいるワシを殺したのではなく、
青い海の上を飛んでいるワシを殺したのだ (29 *9-12*)

ここでは、このワシの羽根が回り回ってデュークの手に入る、ということになっているが、話のつながりは良いとは言えず、混乱した例と考えられる。また、このワシ自体が狩りを行う鳥だったとする例もある。

Не того орла сиза орловича,
Который летает по святой Руси,
Бьет сорок, ворон и серу галицу:
Того орла сиза орловича,
Который летает по синю морю,
Бьет гуся и лебедя
И серу пернату малу утицу;
聖なるルーシを飛び、
カササギやカラスや灰色鳥を殺すワシではなく、
青い海を飛び、雁や白鳥や、
羽毛の生えた小さな灰色鴨を殺すワシの羽根が。 (181 *22-28*)

(8) このタイトルのブィリーナはギリフェルジング中には８編あるが、Г.307は筋が全く異なっている。

(9) ブィリーナでは、酒宴がしばしば描かれるが、そこでは、「白鳥」はご馳走の代名詞になっている。ルィブニコフ中では、「白鳥の肉を食べる、切り分ける」という表現が、Иван Годинович(10),Молодость Чурилы(179),Дюк(63,131,197),Илья и Сокольник(80),Сухмантий(148)など１１編に見られる。